

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 南 和男 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

今年度の共通テストについて、高等学校において授業を行う立場から、1の「はじめに」では本試験「日本史A」と「日本史B」の今年度の平均点など全般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

1 はじめに

平均点は、今年度は「日本史A」が45.38点、「日本史B」が59.75点であった。前年度に比べて平均点は「日本史A」が4.41点、「日本史B」が6.94点それぞれ上がった。これにより、「日本史A」と「日本史B」との差は11.84点から14.37点に拡大された。「日本史B」との共通問題である第2問と第4問は「日本史A」を高等学校で学習してきた受験者にとって、今回は比較的解答しやすい内容であったと思われる。例年要望してきたことであるが、「日本史A」と「日本史B」との平均点の差ができるだけ縮小されるようご配慮をいただきました。以下、それぞれの日本史の試験について検討した結果を述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

日本史A

「日本史A」について、設問数は例年通り大問5題、小問32題の構成であった。出題範囲は幕末から戦後までであり、日本史Aの学習範囲内で適切な設定であった。幕末に関連する問題が昨年度の1問から3問となったが、時代横断型での出題であり、単独での出題は見られなかった。共通テスト3年目の今年も、昨年同様に多様な資料を用いた出題が多くみられた。グラフ、特定の人物やテーマに関するメモ、複数資料による資料読み取り、切手、伝単（ビラ）、写真、年表などである。ただ、地図を用いた出題は昨年同様見られず、空間認識を問う観点が出題上不足しているといえる。

出題形式別では、正文選択が10題、正誤組合せが6題、正文組合せが5題、語句の組合せ、年代配列が各4題、誤文選択が2題、人物・事項の組合せが1題となった。語句の選択問題は出題されなかった。また、昨年に比べ正文選択が増加した一方で、歴史総合や日本史探究を見据えてか、これまでの形式には当てはまらにくい出題形式も見られた。年代配列問題は因果関係や年代ごとの理解によって受験者に正答を選ばせることもでき、歴史的な思考力を問う問題として適切な形式であるが、今年度の出題の中にはやや詳しい知識を問うものもみられた。

時代別では、時代横断型の出題が12題と最も多く、時代ごとの知識・理解をもとに、各時代を比較して多角的・多面的な視野から思考し、判断する力が求められた。各時代を問う問題では、幕末期の単独の出題はなく、明治期は9題、大正期は1題、昭和（戦前・戦中）期は5題、戦後期は5題であった。昨年に比べ、戦後期に関する出題が増加し、日本史Aの学習範囲からの出題バランスとして適切である。また、時代横断型の出題が多いことは、学習指導のうえで留意していくべき点である。例年にみられたような、戦前期に偏った出題でないことで、戦前と戦後の関係性を問うことができている。戦後期は平成以降の出題が今年度は見られなかった。

分野別では、複数の分野に跨る混合問題が15題であり、分野ごとの知識を理解した上で、各時代を多角的・多面的な視点で概観する力が求められた。各分野を問う問題では混合問題も含めると、政治が16題、社会・経済16題、軍事・外交14題、文化が3題であった。今年度は政治・経済両分野からの出題が多かった半面、文化分野からの出題が昨年度よりさらに減少した。軍事・外交分野は昨年度より若干多い出題であった。文化分野の出題が大きく減少したため、出題分野が大きく偏ってしまったことは、次年度以降の課題といえる。以下、詳細を見ていく。

第1問は、切手の歴史に関する会話文形式の問題であった。問1は語句の組合せ問題。会話文内の「郵便制度」「渋沢栄一」から判断できる問題で基本的な知識が問われた。会話文のテーマが「切手」であったことから、視覚資料として「前島密」は切手の絵柄から、「渋沢栄一」は2024年に使用開始となる1万円札の図柄からそれぞれを判断させる問題や、人物と事項の組合せとして出題することも考えられる。問2は誤文選択問題。図や会話文を参考にすることで2～4を正文と判断できる、共通テストらしい良問と言える。問3は会話文から「関東大震災」を見つけ、時期を判断して解答する問題。2023年は関東大震災発生からちょうど100年であり、時事的な視点を持った指導の必要性が示唆された。問4は史料の内容に関する正誤の組合せ問題。Xについては史料文中「欧米に於る慣習」から判断ができる。Yについては杉浦重剛が政教社の一員であり国粋主義に基づくと判断できた受験者は少ないと考えられる。しかし、国粋主義の意味は理解しているべきであり、史料から「政府たるもの徒に欧風を模倣して……」の箇所を見つけることができれば解答ができる。知識と史料の読み取り内容を合わせる共通テストらしい正誤判定問題と言える。問5は戦争に関連する標語やスローガンに関する年代配列問題。それぞれの文章の時代がわかりやすく解答しやすい問題であった。問6は敗戦直後の放送・メディアに関する正文選択問題。各文の内容の時代を区別する必要がある問題であり、文化史の学習を苦手とする受験者にとってはやや難しく感じたであろう。文化史は、資料集等を用いた学習が有効的であることから、視覚的な資料を合わせて出題するという方法も考えられる。問7は資料に関連する文章の組合せを選ぶ問題。資料から時代を特定し、歴史的事実の組合せを解答する形式であり、複合的な出題で良問であった。

第2問は「日本史B」との共通出題。架空の人物「牧野りん」の生涯に関わるメモと会話文形式で、幕末以降の近代の政治・外交・社会史に関する出題。問1は基礎的な知識の確認問題であるが、地名を選択させるのであれば、地図を用いて空間的な認識を問う出題の方が適切であった。特に「下関」について、当時の中国上海と横浜を結ぶうえで重要な交通路になっていたことを指摘することもできた。地図を活用した学習を促すためにも、知識として地名を問うにとどまらない出題が増えることを希望する。問2は幕末から明治期にかけての服装や身なりに関する年代配列問題。詳細な年代ではなく、おおまかな時期を把握していれば解答できる問題であった。文化に関する文章や資料から年代配列をさせる出題も考えられる。問3は史料の正誤の組合せ問題。文Xは、史料を丁寧に読むことで判断ができる。文Yは設問文に「1884年」とあり、国定教科書制度の時期について判断することができる。問4は三人の発言の正誤を判断する問題で、従来の共通テストではあまりみられていない形式である。しかし、「令和7年度大学入学共通テスト」に向けた「歴史総合サンプル問題」第2問の問5に、パネル形式ではあるが三人の内容の正誤判断をする問題が見られる。これらのサンプル問題を活用して出題形式について理解しておくことも必要であろう。生涯の設定をよく読むことで時期を判断しながら解答していくことになるが、屯田兵、憲政党、伊藤博文の憲法調査などに関する知識は、日本史Aの受験者層に鑑みるとやや詳しい知識が求められたといえる。

第3問は、税が経済や社会に与えた影響をテーマとして、明治から大正までの社会経済史と政治・外交の関係性が問われた。問1は会話文中の空欄に入る文章を答える問題。誤文の選択肢は表を丁寧に読み取ること、指定された時期の政治史と照らし合わせることで判断ができた。多角的な判断

が求められている良問であった。問2は地租改正がもたらした変化や影響について考察したメモの空欄に入る語句と文の組合せ問題。空欄イは知識の活用によって判断できる。空欄ウはメモ内の太字箇所「地租を米で徴収」の箇所から政府の立場から米納論の意図を考えることで判断できる。知識のみで解答可能な従来の空欄補充と比べて、資料活用する問題であり良問であった。問3は史料に関する読み取り内容の正誤の組合せ問題。史料に対して丁寧な読み取りが求められた。授業では、初見史料であっても読み取りやすい箇所から取り組ませ、苦手意識をもたせない指導が必要である。問4は日本の工業化に関する年代配列問題。明治・大正時代の重要な内容が選択肢となっているため、解答しやすい問題であった。今回は年代配列問題であったが、ⅠやⅢの内容は年代を伏せたグラフの読み取りから工業化に関する内容を判断させる形の問題も考えられる。問5は史料に関する正文選択問題。史料の読み取りと文化史の知識を組み合わせることで解答できる。『キング』や『万朝報』に関する知識は基礎的な内容であった。問6は日本の関税や国際関係に関する正文組合せ問題。社会経済と外交に関する内容を複合的に活用する必要があり、時代横断型でもある共通テストらしい問題であり、日頃の学習からそれぞれの関連性を意識しておく必要性を感じさせる。問7は税額の変化と選挙権の関係に関する正文選択問題。税額の変化と政治の関係性、さらには政治の影響と選挙権の変化に関して、思考力が問われた。会話文から酒税についてヒントを得させる手法は、会話文を活用する観点からは良かったといえる。選挙資格と有権者数の変遷に関する表を提示したり、治安維持法に関する史料を提示するなど、選択肢の考察内容に関わる資料提示をしたりするといった工夫もできよう。日本史Aの受験者にとってはやや難しい問題であったと考えられる。

第4問は「日本史B」との共通出題。修学旅行に関するメモを題材とした、近代と現代とにまたがるテーマ史であった。問1は語句の組合せ問題。用語だけでなくその目的まで理解しておく必要のある問題であった。下線部に関する文章の中の空欄という形であったが、生徒が各時代の「学校」（学制公布時、大正時代、戦時期の国民学校、学校教育法による新たな学校）に関してカード形式でまとめた資料からの設問も考えられる。問2は二文の正誤組合せ問題。下線部から1896年を把握し日清戦争後であることを理解しておく必要がある。文Xは、上海の開港についてアヘン戦争の講和条約まで学習が行き届いていたか否かで差が生じたと考えられる。新科目「歴史総合」の観点から言えば触れるべき学習ではあるが、従来の学習ではやや疎かになりやすい部分でもある。特に近現代史に関しては東アジアとの関係性や、世界情勢の動きの中での日本について意識的に学習することを促す出題であった。文Yについては史料を読み取り、知識と照らし合わせることで判断ができた。問3は修学旅行の訪問地に関する正文選択問題。釜山・京城が朝鮮、奉天・撫順、大連・旅順などが満州ということ把握できれば解答がしやすい。表の内容と朝鮮総督府や関東都督府などの知識を合わせて解答する形式は複合的と言え、良問である。訪問地という形で地理的な把握を求める出題されたことを考えると、地図資料を用いた設問を考えても良かったかもしれない。その場合は、実際の訪問地を地図上で選択させたり、表にある行程を地図上で表したりするなど、様々な手法が考えられる。問4は表と史料に関する正文の組合せ問題。表・史料ともに選択肢に照らして読み進めていけば判断ができる問題であった。問5は正文選択問題。メモから設立年を確認する必要がある。選択肢の歴史的事項に関する基本的な知識が身につけているかが問われた。①や②は時代のずれから判断ができるが、④のように肢文の考察に関する既述から正誤判断をさせられるとよかった。問6は沖縄国際海洋博覧会に関する正文組合せ問題。沖縄に関する知識と見出し一覧を読み取ることで判断できた。授業内の学習内容だけでなく、資料から事実を確認することができる良問であった。複数の新聞の見出しということなので、実際の当時の紙面から見出しを読み取らせる形の出題も考えられる。問7は二文の正誤組合せ問題。受験者の学習が遅れがちな戦後期であるが、いずれの文章も基本的知識で対応できる問題であった。文Xは「NATO」を想起して判断する。文Y

は「アジア・アフリカ会議」がインドネシアのバンドンで開催されたことから判断できる。冷戦下における戦後日本の多国間の組織は十分に学習が行き届いていない可能性も大きい。戦後史ほど国際的な関係性やつながりを意識した学習を求める出題としては示唆的であった。

第5問は、太平洋戦争期の空襲とその経験を後世に伝える動きに関する問題。問1は敗戦に至る時期の国内状況に関する正文選択問題。選択肢ごとの知識事項と下線部の時期を照らし合わせて判断する問題。問2は史料（伝単資料）を参考に、内容に関する正文の組合せ問題。史料の後半部分を読み取ることでa・bの判断は容易である。伝単の後半から広島への原子爆弾投下が事実として読み取れるため時期の判断ができる。問3は戦後の政治に関する年代配列問題。戦後政治について丁寧な学習が望まれる。問4は史料に関する正誤の組合せ問題。史料の1行目で1950年と判断をした上で、X「ビキニ環礁での水爆実験」、Y「もはや戦後ではない」がそれぞれ1950年以降の出来事と判断しやすかったともいえるが、受験者にとって学習の遅れやすい戦後史であり、かつ経済史、外交史の混合問題であったことから知識の面でやや難しかったと言えよう。問5は1970年代の日本社会に関する誤文選択問題。正誤は判定しやすいと考えられる。日頃の授業の中で戦後史の取り扱いを多くすることが重要である。問6は史料と同時代の対外関係に関する正文選択問題。一部は時代横断型で、知識と史料の読み取りとを合わせることにより解答できる。第5問の出題内容を見ると、この小問ではあえて知識の活用ではなく、レポート形式をとって①のように史料に関する考察を考えたり、史料の内容と関連するまたは学びが深まる別資料について考察させたりすることで思考力を問う問題の形式も考えられる。問7は新傾向であり、「資料集を活用して探究できる内容」と「それぞれの探究に際して最も参照すべき資料集」の組合せを選ぶ問題であった。歴史総合や日本史探究における探究活動を意識した設問であり、思考力を問う共通テストの方針からも良問であった。このような新しい傾向に適応した学習指導が必要である。

日本史 B

「日本史 B」について、設問数は大問6題、小問32題の構成であった。昨年度と同様の問題数であった。出題範囲としては原始（縄文）～現代（昭和戦後）までであり、ここ数年、古代の範囲として縄文・弥生・古墳から出題がないという傾向があったが今年度は小問の一つとして出題されており、日本史 Bの学習範囲内で適切な設定であった。一方で、近代以降の問題は学習内容が濃いことを考えると、戦後史の出題も含めて質的な物足りなさを感じる。共通テストらしさと表現すればその通りではあるが、私立大学の入試問題との乖離が大きくなってきたと感じた。

昨年度に引き続き、授業内の会話文をベースにしたプレゼンテーションやレポート課題などの生徒の学習環境に即した問題設定が盛り込まれていた。また、史資料の活用に注目が集まる中、歴史的関係性のモデル図や、生徒が独自にまとめた資料を読み解く問題も多く、情報処理能力を求める出題が増えている。

出題形式別では、正文の組合せ問題、正誤の組合せ、正誤問題（正文）、人物・事項の組合せが各6題、年代配列問題が5題、語句の組合せ問題が2題、正誤問題（誤文）が1題であった。今年度も大学入試センター試験では各大問に設定されることの多かった語句の組合せ問題が2題と少ない。また、年代配列の問題が昨年の大問ごと1問で合計6問だったものが、今年度も5問と引き続き多く出題された。いずれの問題も、正確な西暦年を求めることなく、関連する人物や歴史的事象の背景を理解していることや、大まかな社会状況を踏まえれば正答を選ぶことができる良問で、短絡的な暗記を助長せずに、時代を通貫する学習を促すメッセージ性のある出題になったと考えられる。

時代別では、過渡期を問う時代横断型の出題が17題と最も多く、時代ごとの知識・理解をもとに、

各時代を比較する複合的な視野が求められた。各時代を問う問題では、古代では平安期1題、中世では室町期2題、戦国期1題、近世では江戸期6題、近現代では明治期3題、昭和戦後期以降2題であった。例年と同様、各時代の特徴を端的に理解し、整理する力が求められた。今年度は時代横断の中に縄文・弥生など原始からの出題があった一方で、明治維新以降の近代国家に関する出題が手薄だったと感じる。現代に生きる私たちとの関係と直結する近代国家形成期に関して、深い理解や思考を必要とする出題を期待する。また、次年度以降も引き続き、出題する時代の均衡が保たれるような配慮をお願いする。

分野別では、複数の分野にまたがる混合問題が11題と例年同様に多かった。今年度も昨年度同様に中世・近世からの出題が社会経済の分野に偏っていたこともあり、社会経済の問題の出題が16問と最も多かった。近世の出題は大問4の構成自体が社会経済を中心とする問いになっており偏りが出やすい設定ではあるが、中世などの他の大問でも出題に活用された資料は社会経済を問いやすいものが多かった。各分野を問う問題では、混合問題も含めると、政治が15題、社会経済16題、軍事外交が12題、文化が6題、混合が11題であった。今年度は例年に比べれば文化に関連する問題が少なく、受験者としては取り組みやすかった。一方で社会経済に関連する諸資料の中には、知識としては頻繁に取り扱われるが実際には読み解いた経験がない資料からの難度の高い出題もあり、戸惑った受験者も少なくないと思われる。以下、詳細を見ていく。

第1問は地図から考える日本の歴史に関する出題であった。鎌倉時代に作成された2枚の地図を題材に生徒の会話文が設定され、さらに先生の説明が新たな資料として提示され問いが立てられている。現在身近にある「地図」と歴史上作成された「地図」を比較し、地図の作成のされ方を通じて行政区分や社会背景を考察させるという設定になっている。身近なものから歴史を学ぶという視点は重要であるが、二つの地図を用いた小問に地図中から必要な情報を得る出題はない。また、地図も必要な地名は白抜きで、書き抜かれた現代の文字を読ませることになっている。資料の読み取り問題が増えているからこそ、厳選した出題をお願いしたい。江戸時代の地図を題材にした後半部分は、地図中の情報から空欄語句補充する問題が出題されている。また組合せのもう一つの空欄語句補充も歴史的な背景を問うている。語句補充もこのような資料の活用や、会話文を踏まえた歴史的背景の出題となれば良問となる。また、問6は歴史用語や歴史的事象の正誤ではなく、各時代の概観を理解しているか、時代を見通すことができるかを問う出題で、今後の日本史探究の学習に通ずるものがある示唆的な出題であった。

第2問は古代の陰陽道に関連して社会・文化・政治についての出題となった。前半部分は特に資料を用いないリード文と下線による出題で取りかかりやすく、後半は資料二つを読み取る資料読解の問題である。問1はここ数年出題がなかった原始からの出題となった。正文選択であり正答の選ぶことは難しくない。選択肢の文のように、歴史用語の「知識」だけではなく、その用語の用途や地図上の位置関係など「理解」の部分まで正誤の判別を問うている点が良問である。問2は説明文と語句の組合せ。選択肢は「陰陽道」に関連して作られているものの、実質的には八省や令外官の知識を確認する問題となっている。問3の年代配列は藤原氏に関連する説明文が挙げられているが、1世紀単位で時代を大きく把握する力が求められる良問である。ただし、Ⅱの「長屋王の変」に関する「外戚の地位が危うくなった藤原氏兄弟」という記述は、特定の教科書にのみ見られるものである。文に含まれる情報から8世紀の奈良時代の政争であることを判断できるものの、特定の教科書の表現に依拠したととられかねない作問にならないようお願いする。後半は史料を読み解く問題で、分量も適切である。リード文に資料を読み解くうえで必要な情報が含まれている点も良い。問4はリード文と史料文で正誤を読み取る構造になっているが、問5は問4と同じ史料に関連して出題しており、史料文の読み取りを必要としない知識によって正誤を判別できる選択肢が含まれてい

る。さらに正文の組合せ問題のため実質的に二者選択問題を二つ解くことになり、リード文と史料文を読まなくても正文を二つ選ぶことは可能である。知識に重きを置く出題を意図するならば、受験者の負担が小さくなる正文選択や誤文選択などシンプルな出題形式の方が望ましい。

第3問は中世の京都に関連して社会・文化・政治についての出題となった。問1は会話文の情報と地図中の情報とを合わせて思考させる問題で、共通テストらしい出題であった。Xの選択肢はリード文の「容器」が「甕」であると判別できれば解答はたやすい。一方、Yは「史料」や「絵画」によって所在した場所を判別するものを「見世棚」と「関所」から選ばせる問題である。京都市内の地図を用いて商業の話をしていることから「見世棚」を選びたいが、リード文にはYに関連する情報はないので「関所」を誤りと判別することが難しい。会話文中に「関所」を消去できるような情報を含ませるなど、工夫が必要だった。問2は年代配列問題。大まかな時代の把握力が問われており、特に平安時代以降の仏教の変遷を問う問題であった。Iが「法皇」の寺院造立への関与から院政期を想起させるのであれば、IIは「撰関家」や「天皇の外戚」などの表現で藤原氏を想起させる工夫がほしかった。ここでは「法成寺」が時代判別の唯一の手がかりで、結果として「法勝寺」と「法成寺」の並び替えという、単なる暗記を求める出題になっている。IIIも「宋」だけが時代判別の用語になっているので「幕府の保護の下で」など時代背景をつかませる説明があるとよかった。問3は平易な史料の読解問題であるが、教科書や授業内での「撰銭」についての説明や生徒の理解と異なることを読み取らせる構造になっており、受験者は混乱したと推測される。一般に、「私鑄銭」が「悪銭」であり、「私鑄銭ではない銭」すなわち「永楽通宝」などの「名の知れた輸入銭」が「精銭」というのが受験者の理解であろう。出題された二つの史料文中にも「永楽銭」があり、これらは受験者の理解の中では「精銭」であり、需要があるはずの貨幣であった。しかし史料文中の「永楽銭」は強制しないと「取引されない」、すなわち「需要が低い」と読み取れることになり、これが正文となる。一次史料から読みとらせるのが共通テストの特徴であるにしても、受験者の学習内容を揺さぶるような出題は避けるよう強く願います。全国の正答率が一桁になったことを重く受け止めていただきたい。問4は今年度では数少ない文化史の出題であったが、史料の提示はなく知識を問うだけの問題となった。①④は絵画作品であり、③も絵で表せる内容であるならば、視覚的な出題が考えられる。特に文化史の学習は短絡的な暗記に陥りやすい。資料集などを通じた視覚的な対策を促す意味でも、文化史に関連する問題は知識の有無だけで正答を選ばせる出題は避けるよう願います。問5は概念図に基づく思考を求める問題で良問である。歴史用語を知識としてだけではなく周辺の関連する用語と有機的に結び付け、体系的な知識として整理する力が試される出題で、特に学習のまとめや単元の整理に適した様式である。引き続きこのような出題を期待する。

第4問は近世の人々の結びつきに関する会話文による、社会・経済・政治についての出題である。問1は会話文の前後の文脈から空欄を補充する問題で江戸時代の基礎・基本を確認する問題であった。関所の廃止や御蔭参りに水路が活用されていないことは明確なので答えは選びやすい。問2は江戸時代における商業の発達に関する年代配列問題。IIの「十組問屋」の成立時期については、「鎖国体制」が始まって「田沼政治」の前には「全国市場が確立」しているはずである、との推測により正答を選ぶことになる。詳細な知識を求めず解答させる意図は理解できるが、一部の教科書が17世紀末と説明しているほかは、大半の教科書が明確な時期を示していない。年代配列問題は、詳細な年代暗記に依存せずに解答できることはもちろんであるが、教科書記述から正確な時期の判別が難しい事項は避けるような配慮をお願いする。問3は文化史に関連する資料読み取り問題ではあるが、正答を導くためには「津山藩」「備前藩」が関東地方ではないことを理解し、旧字体の「蘭学」を判別できる必要がある。問4は史料の読み取りと問題文中の情報から正文を組み合わせる問題。史料は脚注を丁寧に活用すれば読み取ることは難しくなく、問題文中の西暦年から正徳の治よりも

後であることが判別できれば正文を選ぶことができる。問題文中の「1751年」を「宝暦年間」とすれば「年代把握や時代の移り変わりの理解」といった趣旨が明確にできるだろう。選択肢cは「鎖国」を学習する際に「通商国」「通信国」を理解していないと「正式な外交使節の行き来」の意味が理解し難かったであろう。問5は第4問のまとめのような問題文で、江戸時代の社会・経済、文化、政治と多岐にわたる基礎・基本を確認するという意味で良問である。

第5問は「日本史A」との共通出題。架空の人物「牧野りん」を題材にした劇に関連した会話文による幕末以降の近代の政治・外交・社会史についての出題である。問1は基礎的な知識の確認問題であるが、地名を選択させるのであれば、地図を用いて空間的な認識を問う出題の方が適切であった。特に「下関」について、当時の中国上海と横浜を結ぶうえで重要な交通路になっていたことを指摘することもできた。地図を活用した学習を促すためにも、知識として地名を問うにとどまらない出題が増えることを希望する。問2の年代配列は時期が近接しているものの、社会の変化が速い時代でもあり、特徴的な出来事を並び替えるため受験者にとっては解答しやすかったであろう。ただし、扱われている歴史事象はⅠ「廃刀令からの不平士族の反乱」Ⅱ「鹿鳴館の舞踏会からの井上外交の失敗」Ⅲ「ええじゃないかの乱舞」で、設問文の「服装や身なりに関わる出来事」と直接結びつか疑いがある。問3は、Xは史料の読解で正文だと判別でき、Yは問題文中の「1884年」という西暦年と「国定教科書」が使用され始めた時期を判別できれば誤文だと判別できる。問4は「時代考証」を疑似体験するような出題形式で共通テストらしい出題である。ただし、問われているのは、屯田兵、憲政党、伊藤博文の憲法調査に関する知識である。受験者の正確な知識や情報処理能力を問うのであれば、解答の形式を三つの正誤の組合せによる八文選択にするなど工夫が必要であった。今回の四文選択では三人の発言を確認せずとも正答を導くことが可能であった。

第6問は「日本史A」との共通出題。旅行に関するメモを題材とした近現代にまたがるテーマ史である。問1は教育に関連した基本的な知識を問う問題で取り組みやすかった。問2はXの上海の開港についてアヘン戦争の講和条約まで学習が行き届いていたか否かで差が生じたと考えられる。新科目「歴史総合」の観点からは触れるべき事項ではあるが、従来の学習では疎かになりやすい部分でもある。特に近現代史に関しては東アジアとの関係性や、世界情勢と日本との関わりについて意識的に学習することを促す示唆的な出題であった。問3は満州・朝鮮半島における地名と歴史上の出来事を結び付けた出題であった。しかし、表中の地名と選択肢の説明のつながりを問うだけでは暗記を促すにとどまるであろう。表だけでなく地図を用いて旅行の行程を示し、歴史的な出来事を訪れる順番に並び替えさせるなど工夫もできよう。知識を活用させるために史料を活用する出題をお願いする。問4は正答を導くために表の読み取りと、史料文の理解が必要とされている。日本史の専門知識を要しない、共通テストらしい出題ではあるが、これを正解する能力と日本史の学力には質的な差異がある。炭鉱に関する年表中の時期判別をさせるなど、歴史上にこの史資料を位置付けたうえでの工夫がほしい。問5は「ジャパン・ツーリスト・ビューロー設立(1912年)」に関連する出題とされているが、この機関に関して受験者には既習内容に基づく知識はないので、「1912年」を手がかりに考えることになる。選択肢は時代を概観するような説明で詳しい知識を求めているが、年表中の「日露戦争」と「第二次世界大戦」の間の設立であることを明示して1910年前後の社会状況を考えさせるなどの工夫もできる。問6は見出し一覧よりも実際の新聞の紙面があると臨場感が伝わりやすい。史料として提示できる量にはおのずと限度があるが、文字の大きさや書体などにもメディアは意味を持たせるはずで、そういった情報も読み取らせたい。問7のXは日本には集団安全保障に関する憲法上の制約があることを理解していれば、誤文と判別できる。「冷戦下の西ヨーロッパ」という説明から「NATO」を意識させることを意図したと察するが、「共同防衛組織」を「国際連合」や「日米同盟」「米韓同盟」の総称と誤解して正文としてしまう受験者もいたのではな

いだろうか。Yのアジア・アフリカ会議も、冷戦下における第三世界の存在感を把握していれば日本は関係ないと判別できる。国際的な関係性やつながりを意識した学習を求める出題としては示唆的であり、今後の歴史総合に向けた学習にもつながる示唆的な出題であった。

3 ま と め

今年度は、大学入学共通テスト3年目とはいえ、いまだに共通テストの傾向を把握できているわけではなく、出題の形式や内容をめぐり、教育現場も期待と不安とが交錯する一年であった。

「日本史A」は全体を通じて昨年同様に史料や表、グラフなど多様な資料を活用し、思考・判断させる意図がみえる問題が多い構成であった。昨年一部にみられた、受験者の学習範囲からは解答しにくい知識問題も極力避けられていて、学習到達度をはかるために適切な難易度であったといえる。ただ、年代の暗記や史料から年代や時期を判断することで正答を導くことのできる問題が多かったことは、出題の手法としては今後工夫していく必要がある。例えば、複数の史資料からわかることを根拠とし、歴史に対する考察を選択する形式や、今回出題されたような資料と当時の背景に関する知識を同時に活用させるといった形式は思考力・判断力を問うのに適している。文化史に関する出題が減少していることについては、出題分野のバランスの観点から改善されることを期待している。資料活用から思考・判断する問題が次年度以降も出題されることで、教員にとっては指導の方向性が、受験者にとっては学習の方向性が明確になっていくと考えられるため、今後も構成上の継続をお願いする。

次に「日本史B」は全体を通して、各分野の特徴を網羅した内容であり、文章の読解力を重視した出題を維持しつつも、図版・表・史料といった豊富な資料を昨年以上に活用し、思考・判断につなげる出題が多く見られた。受験者及び指導にあたった教員にとって、不易と流行の均衡のとれた出題であったように思われる。ただし、資料活用を重視するあまり、受験者の負担が大きくなっているのも事実であり、「日本史B」の学力を測るに適切な分量になるよう均衡をとっていただくようお願いする。また、史料読み取りとはいえ歴史的な知識よりも国語的な読解を必要とする問題も含まれ、教科の専門性も十分に発揮できるよう出題形式の工夫をお願いする。時代による出題に偏りは今年度も見られた。特定の時代に出題が集中しないように引き続き配慮をお願いする。特に、次年度は原始・古代（旧石器・縄文・弥生・古墳等）、中世（南北朝）からの出題が増えることに期待する。また出題形式について、年代配列問題が昨年より増加していたが「人物」や「出来事」の暗記に拠らなければ解けない問題も散見された。思考・判断・表現を基礎とする学習によって解くことができる設定をお願いする。また次年度以降も、選択肢の分散にも留意されるようお願いする。

なお、毎年のように述べていることではあるが、「日本史A」「日本史B」の科目としての性格の違いを考えれば、共通問題の出題はできるだけ避けていただきたく、引き続き検討をお願いする。